
ぬくもりを彼方に(ジャファル×ニノ、レイ×ソフィーヤ)

ミニヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぬくもりを彼方に（ジャファル×二ノ、レイ×ソフィヤ）

【Nコード】

N1531B

【作者名】

ミニヤ

【あらすじ】

烈火の剣より、ジャファル×二ノSSです。このSSは、沖城こ様のHP<コロツケ堂>、並びに社様のHP<カスタネット>のお絵かきBBSを元に作らせて頂きました（当事者の了解済みです。）

進軍の間にある、束の間の休憩時間。

丁度あった大きな木の幹に背中を預けて難しそうな本を読んでいる紫髪の男の隣で、

肩ぐらいの長さの緑髪の少女が綿と布を使って熱心に何かを縫っている。

男の名はカナス。濃い紫色の髪と端正な顔、髪と同色の優しい瞳。右目には一眼鏡をつけている。

とても穏やかな性格で、魔道士でも学者でもあり恐ろしく博識だ。隣にいる少女の名は二ノ。歳は13か14ぐらい。

明るい緑色の髪と同色の瞳、愛らしい顔立ちで元気の良さが溢れている。

カナスは二ノに文字を教えてくれた。

そして次に穴の繕い方や布の縫い方を教えてくれたので、二ノは初めて縫う事を覚えた。

彼は綺麗な色や模様のついた布、本来ならば糸にする綿をたくさん持っていたので二ノは大喜びだった。

以来、休憩時間の間は一生懸命人形作りに取り組む二ノの姿が見られるようになった

そして。

「やった〜！！やつと完成」

二ノが嬉しそうに叫んで伸びをして、いそいそと裁縫道具を片付け始めた。

「どれどれ・・・？」

カナスは本を閉じて地面に置くと二ノが作っていた人形を持ち、目を細めて眺めた。

「うん、とっても可愛く出来てるよ。」

「本当！？」

「ええ。」

カナスが頷くと二ノの顔がパツと輝いた。

「何が完成したんだい？」

不意に、男の声がした。

二人が声のした方を向くと、幹の後ろから長身の男が顔を覗かせた。銀に近い紫色の、真っ直ぐで長い髪を額に巻いた布で押さええている。左目には鉤爪でつけられたような傷が残っているが、それを除けば決して悪い顔立ちではない。

顔に浮かべる笑いが、どこかしら余裕のようなものを漂わせている。

「よう、二ノ。」

「ラガルトおじさん♪」

「うつ・・あ、それとあんたは確かカナスさん・・だっけかな？」

「はい。」

カナスがラガルトに向かって一つ頷く。

「あなたはラガルトさんですね、こんにちば。」

「おう、宜しく頼むよ。ところで二ノ、何をそんな一生懸命やってたんだい？」

「カナスさんにこの前から人形の縫い方を教えて貰ってたの。それでこれ、やっと完成したんだ。」

二ノが差し出してきた人形を受け取ると、

ラガルトは好奇心の入り混じった目を人形に向ける。

布を器用に使って人形の顔、髪、服が作ってある。

中には綿が入っているのだろう、とても柔らかい。

「可愛いねえ、こりや女の子かい？」

「うん！」

ありがとよ、言っただけ人形を返す。

「二ノと同じ緑の髪をしてるな。そう言えば、服装も似てるぞ・・？」

彼のその言葉を聞いて、二ノはとても嬉しそうに頷いた。

「そうなの！私に似せてあるんだよ」

「上手じゃないか、ちゃんと二ノに似てるぜ。けど、何で似せるんだ？」

ラガルトがそう聞くと、二ノはほんの少し頬を赤く染める。

「えっと・・・その、あのね・・・」

二ノがどもっているのを見て、カナスは微笑む。

「どうしても、あげたい男性がいるそうです。」

「おやおや。」

とうとう二ノにも好きな奴が出来たのか・・・

とラガルトが意味ありげな目で見ると、それが伝わったのか二ノが更に頬を赤くした。

「あの・・・あのね、ジャファルにあげるんだ！」

「へ、へえ・・・」

かろろじて笑顔を保ってはいるものの少し顔が引きつる。

けれどその一方でやはりそうだったのか、とも思った。

二ノが奴に対して特別な感情を抱いているのは、

よほど鈍い奴でない限り一目瞭然だろう。

そして奴も二ノに対してだけは穏やかな態度をとっている。

だが無口、無愛想の権化のようなあの男が人形をもらう場面・・・想像できない。

まあ、二ノを悲しませるような事だけはしないだろうが・・・

「ジャファル・・・？」

カナスがその名を聞いて、ちよつとの間首を傾げポンツと腕を叩いた。

「ああ、思い出した少し目つきの鋭い彼だね。そうか、気に入ってくれるといいね。」

「うん！！」

二ノが勢い良く頷いた。

「おじさん、カナスさん、ジャファルを探してくる！」

そう言つて、自分を模った人形を丁寧に綺麗な布でくるんだ。

「ははっ行つてらっしゃい。」

カナスが笑顔で二ノに向かつて手を振る。

「おう、気を付けてな。」

ラガルトも手を振る。と、勢い良く踵を返した二ノから何かが落ちた。

「二ノちゃん！」

「おいっ待て二ノ、何か落としたぞ！」

走りかけた二ノを二人で慌てて呼び止める。

ラガルトが拾い上げたそれは黒いマントに黒い服を着ている、逆毛で茶色い髪 of 男の人形。

よくよく見ると誰かに似ているような・・・。

「え？あ、ありがとう！！！」

二人に呼び止められ、

驚いて振り返った二ノはラガルトの手にある物を見て慌てて受け取りに来ると、

大事そうに胸に抱きしめ再び走って行った。

「なあ、カナスさん。」

「どうしました？」

「さっき落ちた人形って・・・。」

ああ、あれは・・・とカナスが面白そうに続けた。

「二ノちゃんが、ジャファル君に似せて作ってたんですよ。」

布の縫い方をマスターしてから真っ先に取り組んでいたんです。それを聞いたラガルトは手で口を押さえ、こみ上げてくる笑いを堪えた。

「くくっなるほどねえ・・・やっぱりそう言う事か。」

「くすくす、そうみたいですな。」

「ジャファル！ジャ〜ファ〜ル〜！どこ？」

「・・・何だ。」

背後から声がしたので振り返ると、そこにはいつの間にかジャファルが立っていた。

振り向いて、慌ててジャファル人形を背後に隠す。

「あのね、見せたいものがあるんだ。」

はいつと言って後ろに隠した人形を彼の目の前に突き出す。

「ジャファルに似せた人形を作ってみたの。どう？似てるかな？」

ジャファルは黙って二ノからその人形を受け取り、少し傾けてみたりして観察する。

「・・・悪くない。」

そう言って、二ノに人形を返す。

「えへへ、自分で作つといてなんだけど、これ持つてると、

ジャファルが忙しくて一緒にいれない時でもずっと側にいてくれるみたいで、

すつごく安心するんだよ。」

ジャファルの言葉が嬉しかったのか、二ノが少し頬を赤く染めて照れながら言う。

「そうか・・・。」

「それでね・・・ハイッ！これでいつも一緒だよジャファル。」

そう言った二ノから差し出されたのは何かを包んだ布だった。

「……………」

「ね、布とつてみて？」

二ノに言われるがまま布を取り外すと、出てきたのは緑の髪の女の子の人形。

「それ、何だか分かる？」

ジャファルは人形をしばらく観察した後、二ノに視線を戻す。

「これは・・・お前か。」

「うん！」

「俺に？」

「だって、その為に作って来たんだよ？」

「・・・分かった。」

二ノの言葉に一つ、頷く。

「・・・大事にする。」

目を閉じて、綿と布で出来た人形の温かさを感じ取る。

「！本当！？」

「ああ・・・。」

目を開けて、目の前の少女の笑顔を見つめた。

「嬉しい・・・！ジャファル大好き！」

二ノはピョンツとジャンプして、

自分より遥かに高い位置にあるジャファルの首に、

両腕を回してぶら下がるとすがりついた。

「よっお二人さん。仲がいいねえ。」

その声を聞いて、ジャファルにぶら下がった格好のまま二ノが顔をこちらに向ける。

「ラガルトおじさんっ。」

「疾風・・・。」

二ノを片手で軽々と支えつつジャファルが呟く。

「どうしたの？」

「いや、しばらくカナスさんと喋ってたんだがあんまし勉強の邪魔するものなんだしな。」

「・・・と言っても暇なもんで散歩してたらここに着いたって訳だ。」
あれからどうなったのかと言う好奇心で来たのは伏せておく。

「あ、いつけないっ。」

「・・・どうした？」

「カナスさんに、ちゃんとお礼言うの忘れてた！」

そう言うなりジャファルの首に回した両腕を放し、二ノが地面に降りる。

「カナス・・・？」

「うん。」

首を傾げるジャファルに、二ノがジャファルを模った人形を見せてきた。

「私に、この作り方を教えてくれた人。それじゃ行つて来るね！」

パタパタと元来た道を走つて行く二ノを二人で見送る。

「じゃ、俺もどっか行くとするかな。またな。」

「・・・疾風。」

「うわつとと、何だい？ジャファル。」

歩き始ようとした所にボソツとジャファルの声がしたので、慌ててそちらを向く。

最近はジャファルの声を聞くことがそう珍しい訳でもないのだが、突然話しかけられるとやはり驚く。

それから少し付け加えた。

「俺はラガルト。いい加減疾風つてのは・・・」

「ラガルト。」

「・・・何だ？」

「・・・。。。」

しかし、ジャファルは何も言わない。

「・・・。。。」

「・・・。。。」

二人の間に、更に沈黙が続いた。

「・・・一体どうした？」

沈黙に負けて口を開いたラガルトの前にジャファルが無言で差し出して来たのは、

二ノが彼の為に一生懸命作っていた二ノ人形。

「それは？ふん、もしかして二ノからのプレゼントかい？」

「・・・ああ。」

「可愛い人形じゃないか、俺が欲しいぐらいだよ。」

その言葉を聞くなりジャファルはラガルトを見る目つきを鋭くし、人形をマントの内側に素早く引っ込めてさっさと歩いて行ってしまった。

「あちゃー、本気にしちゃったかな？」

首を傾げて呟いて、苦笑しながら彼の後姿を見送った。

「それにしても・・・さっきのは自慢・・・のつもりなんだろうな。」
「ぼそつと呟き、一人で納得するラガルトでありました。」

一方、その頃二ノはと言うと・・・。

「カナスさん！」

相変わらず本を読んでいるカナスの前に息をきらせて走って来ると、ちよこんとその場に座り込む。

「二ノちゃん。」

ボタンと本を閉じると、目を輝かせている二ノに向かって笑いかけた。

「どうしたの？すごく嬉しそうだけど。」

「あのね、あの人形の事なんだけど、ジャファルが大事にするって言うてくれたんだ。」

カナスさんが色々教えてくれたお陰だよ、ありがとう！」

「そうか、それは良かった。」

「うんつ。それでね、はい。」

二ノが差し出したのは、彼女が作っていた二体に比べると少し小さく、

カナスと同じ紫の髪をした可愛らしい赤ちゃんの人形だった。

「これは・・・？」

受け取ってみたものの、不思議そうに首を傾げて二ノを見る。

「カナスさんの息子さん。ヒュウ君・・・だったよね？」

えつと、カナスさんから話聞いてたからきつとこんな感じかな？
って思ってた内緒で作ってたの。下手だけど、その・・・お礼に。」

「二ノちゃん・・・。」

カナスが突然ハンカチを出して目をぬぐい始めるので二ノは驚いて目を丸くした。

「あ、え？カナスさん？な、泣かなくても・・・。」

何か悪い事をしたのかとおろおろとする二ノに向かって、
カナスは更に優しい微笑を向けた。

「ありがとう、二ノちゃん。思わず感動しちゃったよ。これは大切に息子へのお土産にするからね。」
そして、その人形はどうなったかと言うと……。

「……あら……？」

少女は、草むらに落ちていた何かを見つけて拾い上げた。その少女の色は白く、細い身体にどこか儂げな顔立ちで、風になびく長い真っ直ぐな髪は薄い銀がかった紫色をしていた。

「まあ可愛い……。」

呟いて、しばらくその人形を見つめていると後ろから朗らかな声がした。

「あ、レイ。あの人ソフィーヤさんじゃない？」

「本当だ、おい！ソフィーヤ！」

ソフィーヤと呼ばれた少女が振り返ると、

そこには明るい緑色の髪と目をした二人の男の子が立っていた。

彼らは一卵性の双子で兄がルウ、弟がレイである。

「レイ……ルウさん……。」

「お前、こんなとこで何やってるんだ？」

「……見てください……人形を見つけました……。」

ソフィーヤが拾った人形を差し出すと、二人が近寄ってきて人形に視線を向けた。

「わー可愛いね。」

ルウが微笑む。

「けど、汚い人形だな。」

レイがぼそつと呟く。

「本当、随分古い物みたい。」

三人が人形に注目し、周りに注意を払っていなかったその時。

「よっルウ……とレイ。それとあんたはソフィーヤ……だっけかな？」

陽気な男の声がした。

三人が声をした方を見ると、肩から少し下までの軽くウェーブがかった紫色の髪と同色の瞳、整った顔立ちをしている青年が立っていた。

「はい・・・こんにちは・・・」

ソフィーヤは軽く頭を下げてお辞儀をする。

「こんにちは、ヒュウさん。」

「何か用か？」

「ちよつと探し物してんだ。お前らこの辺でちっこい人形見なかったか？」

三人を代わる代わる見ながらヒュウが訪ねてくる。

「え？もしかしてソフィーヤさんの持つてるこれ？」

と、ルウが人形を指差した。

「おゝっそうそうそれだ。」

「・・・そうだったのですか・・・どうぞ・・・」

ヒュウの言葉を聞いてソフィーヤは人形を差し出す。

「あんたが拾ってくれたのか？ありがとよ。」

「はい・・・。」

ヒュウの言葉を聞いてソフィーヤが軽く微笑む。

「へえ、あんた人形なんか持ち歩く趣味があつたんだ。」

ふんつとレイが鼻先で笑う。

「うつうるせーよ。だがな、

同じ人形でもこれは死んだ親父が土産にくれた物なんだぜ。言わば形見つて訳だ。」

「ふゝん・・・。」

「へえ〜。」

興味なさそうなレイと、感心しているルウ。同じ双子でも性格は全然違うのである。

「うん、大事な形見だもんね。」

「だろ？」

「落としたじゃん。」

「うつ・・ま、まあ今回落としたのは誤算だったが、何にせよ見つかって良かったぜ。」

「・・可愛い人形ですね・・。」

ソフィーヤの言葉にヒュウは軽く笑う。

「そう思うか？実はこれ、俺なんだとよ。」

「はあ？」

「え、そうなの？」

「よく出来てるだろ？」

首を傾げながらルウは改めてその人形を観察する。

「言われてみれば、紫色の髪と瞳が同じだね。」

「本当にあんたか？可愛過ぎだろ。」

「このっ・・い、いや親父の知り合いで魔道士だった女の子から貰った物らしくてな、

その女の子が親父から赤ん坊だった俺の話を聞いて作った物なんだってさ。

「ばあちゃんから聞いたんだけどよ、

俺ってガキの頃この人形がすごい気に入ってて無いと眠れなかつ

たらしいぜ。」

「くっ。」

「くすくす。」

「あははっ」

その場に和やかな笑いが起きた。

「あ、ねえヒュウさん。」

笑った後、ルウが気がついたように言う。

「ん？」

「もうちょつと見せて貰っていい？」

「何だ、気に入ったのか？ほらよ。」

ヒュウが差し出した人形をルウが嬉しそうに受け取る。

「ありがとうつ。人形ってあんまし見た事なかったから。」

人形を傾けたり、縫い目を確かめたりしながらレイに話しかける。

「僕にも作れるかな？孤児院の子供たちに作ってあげたら喜びそうだね。」

あ、チャドなら出来るか。」

「だろーな。兄貴、ちよつと貸して。」

「はいはい。」

「ふん、ほんつとーに似てねーなー。」

そう言いつつ人形を受け取り持ち上げて眺める。

と、興味深そうな顔をして自分と人形を見ているソフィーヤに気がついた。

「？何だよ、何か言いたいのか？」

「・・・その人形・・・ルウさんやレイに会えて喜んでいるみたいで
す・・・」

「はぁ？またお前は訳分かんねー事を・・・」

決まり悪そうにしながらも、レイが人形に視線を戻す。

その人形からは、何故か懐かしさと温かさが伝わって来る気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1531b/>

ぬくもりを彼方に(ジャファル×ニノ、レイ×ソフィーヤ)

2010年10月9日06時40分発行